

かいせいひょう

甲斐文青萍

熊本町並画集

江戸・明治・大正・昭和

伊藤重剛 編著

熊本日日新聞社



目次

序

2

熊本城下町並図屏風

一	熊本城下町並図屏風(全体)	8
二	熊本城全景(部分一)	10
三	洗馬橋・新町・山崎町界隈(部分二)	11
四	花畑屋敷と蔵橋付近(部分三)	12
五	追廻田畑・下通・高田原(部分四)	14
六	子飼・浄行寺・外坪井(部分五)	16
七	長六橋界隈(部分六)	17
八	白川(部分七)	18
九	白川 安巳橋下流付近(部分八)	18

熊本明治町並図屏風

一〇	熊本明治町並図屏風(全体)	20
一一	山崎練兵場ほか第六師団施設(部分一)	22
一二	騎兵第六連隊(部分二)	24
一三	歩兵第二十三連隊(部分三)	25
一四	山崎練兵場と糧重廠(部分四)	26
一五	砲兵第六大隊と衛戍病院(部分五)	27
一六	洗馬橋界隈(部分六)	28
一七	慶徳小学校と唐人町通(部分七)	29
一八	追廻田畑(部分八)	30
一九	手取本町・敷之内(部分九)	32
二〇	興立病院・医学校と高等小学校(部分一〇)	34
二一	熊本監獄(部分一一)	35



二三	手取本町・兼町通・安巴橋通(部分二)	36
二三	上通・手取本町(部分三)	38
二四	パノラマ館と敷島座(部分一四)	39
二五	下通北側と安巴橋通(部分一五)	40
二六	下通南側と高田原(部分一六)	41

熊本昭和町並図屏風

二七	熊本昭和町並図屏風(全巻)	42
二八	手取本町と市役所付近(部分二)	44
二九	追廻田畑と花畑町(部分二)	46
三〇	新市街付近(部分三)	47

追憶の熊本

三一	安巴橋通 白水館(明治三十七、八年ころ)	48
三二	安巴橋通 市原屋呉服店付近(明治十九年ころ)	49
三三	安巴橋通 昇町入口・青萍自宅(明治四十五年ころ)	50
三四	安巴橋通 昇町入口・森田屋と志柿文具店(昭和十八年ころ)	51
三五	安巴橋通 鶴島屋呉服店付近	52
三六	安巴橋通 歩町通入口・蕎麦屋(明治二十七年、八年ころ)	52
三七	安巴橋通 願正寺前	53
三八	安巴橋通 鯉屋	53
三九	安巴橋通 甘酒饅頭屋と加藤酒屋	54

四〇	安巴橋通 加藤酒屋から東側付近(明治三十年ころ)	55
四一	安巴橋通 有田足袋店・加藤酒屋付近(明治二十四、五年ころ)	56
四二	安巴橋通 中野酒屋から千徳呉服店付近(明治四十年ころ)	57
四三	安巴橋通 千徳呉服店・茶屋・水道町通への入口	58
四四	下通 高森帽子店付近	59
四五	昇町 尚綱女学校(大正年間)	60
四六	昇町 市野質店付近(昭和二十年ころ)	60
四七	水道町 松藤米屋付近(昭和十四、五年ころ)	61
四八	手取本町 手取小学校(大正年間)	61
四九	手取本町 下通入口・研屋支店	62
五〇	手取本町 上通入口・圓部薬店・梅の湯・細西米店	63
五一	上通 六丁目温古堂付近(明治二十六年ころ)	64
五二	上通 九州日日新聞社と鎮西館入口(明治三十二、三年ころ)	65
五三	既橋 熊本電灯会社と県立病院(明治三十年ころ)	66
五四	既橋 船着場と熊本監獄	67
五五	藪之内 濟々齋(明治三十年ころ)	68
五六	藪之内 濟々齋と坪井川(明治三十二、三年ころ)	69
五七	内坪井 力食社・力食橋・工兵橋(明治三十年ころ)	70
五八	追廻田畑 安巴橋通西端の歩兵第二十三連隊裏門	71
五九	追廻田畑 歩兵第二十三連隊裏の道と民家(明治三十年ころ)	72
六〇	追廻田畑 パノラマ館(明治三十年ころ)	73
六一	追廻田畑 新道(明治三十八、九年ころ)	74
六二	下馬橋付近	75
六三	洗馬町入口 騎兵第六連隊裏(明治三十二、三年ころ)	76

六四	歩兵第二十三連隊と騎兵第六連隊 (明治二十五、六年ころ)	76
六五	山崎練兵場・細重殿・征清記念碑 (明治三十二、三年ころ)	77
六六	山崎天神と山崎練兵場 (明治三十年ころ)	77
六七	安巳橋東側の馬車立場	78
六八	水前寺新道と軽便鉄道 (明治四十年ころ)	79
六九	九品寺演武場旧台場 (明治四十四、五年ころ)	80
七〇	九品寺町 (明治三十年ころ)	80
七一	熊中通 (大正初年ころ)	81
七二	水前寺入口 (明治二十八、九年ころ)	82
七三	水前寺旧道と稻荷道 (明治二十六、七年ころ)	83
七四	安巳橋通 三年坂四つ角から西側付近	84
七五	手取本町 手取小学校付近	85
七六	上通 九州日日新聞社と鎮西館入口	86
七七	洗馬橋と高橋舟	87
七八	旧塩屋町入口	87
七九	文林堂	88
八〇	唐人町 競商場	89
八一	安巳橋通明治町並園 (全体)	90
八二	安巳橋通明治町並園 (部分一)	92
八三	安巳橋通明治町並園 (部分二)	93
八四	安巳橋通明治町並園 (部分三)	94

単独作品

八五	安巳橋通明治町並園 (部分四)	95
八六	既橋界限と熊本電灯会社	96
八七	既橋界限 県立病院・医学校と濟々曇	97
八八	上通 九州日日新聞前	98
八九	上通 三丁目付近	99
九〇	藪之内 濟々曇・熊本中学校全景図	100
九一	熊本高等小学校 (明治二十七、八年ころ)	102
九二	大江 熊本中学校正門と玄関	102
九三	大江 熊本中学校全景図	103
九四	水前寺新道 熊本中学校・変電所 (明治志)	104
九五	京町台から金峰山遠望	106
熊本明治風俗画・歴史画		
九六	明治時代市民風俗	108
九七	明治大正の風俗 (全体)	110
九八	明治大正の風俗 (部分一)	111
九九	明治大正の風俗 (部分二)	112
一〇〇	明治大正の風俗 (部分三)	113
一〇一	白川大洪水での安巳橋流失 (明治三十三年)	114
一〇二	山崎練兵場での招魂祭 (明治十八、三十七年)	115
一〇三	陸軍特別大演習での明治天皇市内御巡幸 (明治三十五年)	116
一〇四	明治天皇大喪の日の熊本市内 (明治四十五年)	117

熊本明治町並図屏風

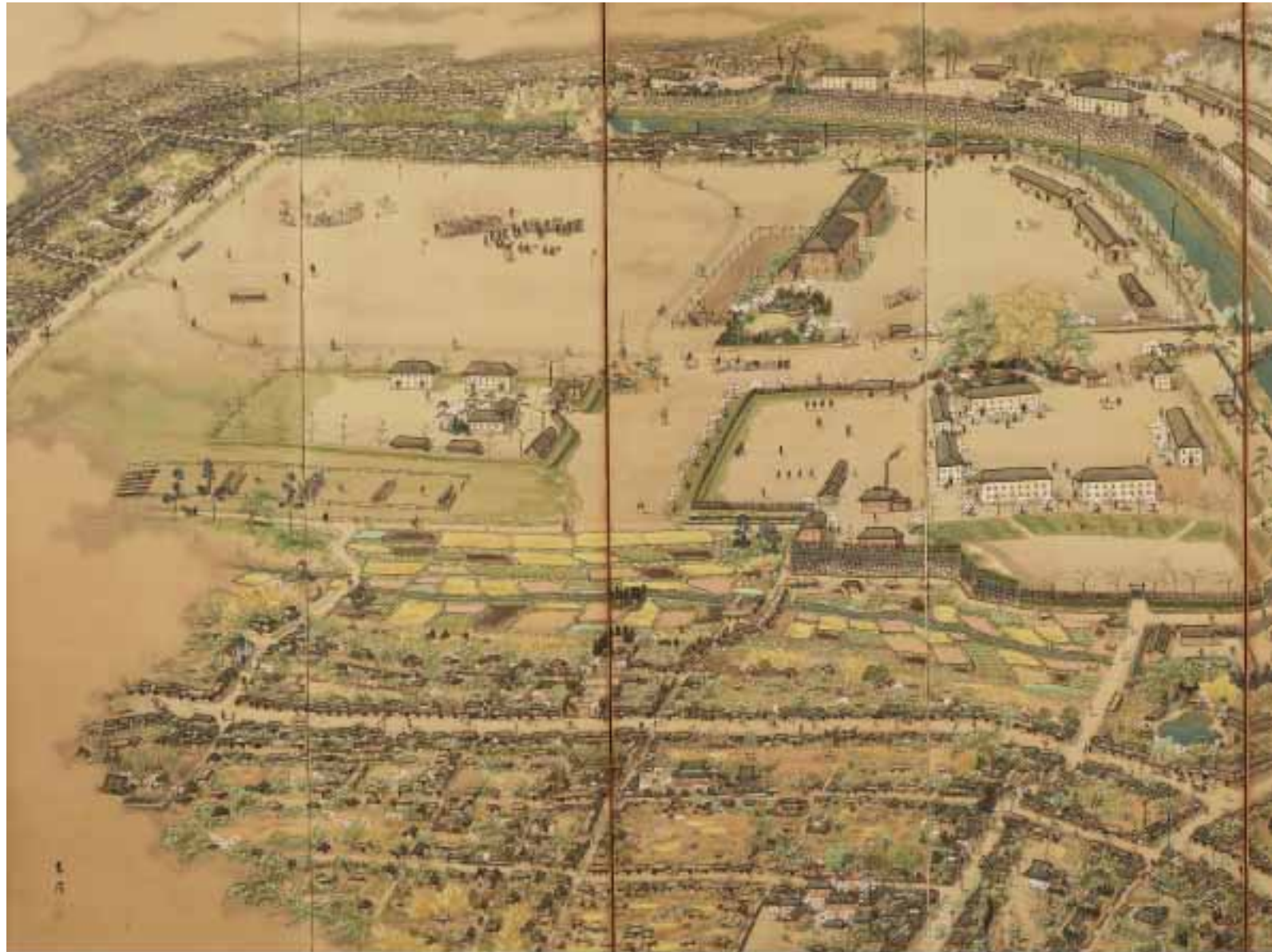


一〇

熊本明治町並図屏風（全体）

「熊本明治町並図屏風」は、「熊本城下町並図屏風」と比べると、市内の中心部だけを描いている。上は洗馬橋脇の郵便局付近から下は高田原まで、東は下馬橋や真横の付近から、古町辺りまでを描いているが、絵の中心は山崎練兵場を中心とする中央の第六師団の軍事施設である。

明治政府は熊本を九州防備の拠点として、明治四年に鎮西（熊本）鎮台を置き、これは二十二年には第六師団と置いた。その過程で藩主が居住した広大な花畑屋敷を軍が接収して、歩兵第二十三連隊を設置した。明治十年の西南戦争で市内の大半は焼土と化し、上級武士の住宅地区であった山崎町はこれを機会に、それまでの練兵場の狭隘（せうがい）を解決するために軍に接収され、山崎練兵場となった。これによって、



花畑屋敷跡の歩兵第二十三連隊、現在の市民会館から交通センターにかけての騎兵第六連隊、辛島町付近の輜重廠（くわじゅう）を含む広大な軍事施設が市の中心部を占めることとなり、熊本は文字通り軍都としての名を恣（おご）にした。しかし、都市の中心部を軍事施設が占めることは都市の発展の大きな阻害要因となり、また軍制としてもっと広い敷地を必要とするようになった。そのため明治末期から大正初期にかけて、辛島格市長の努力で軍事施設は順次、大江渡鹿に移転することとなった。

青井は、このころの熊本の町を絵図としてよく描いており、航空写真などが撮られなかった当時のことを考えると、現在では町全体の様子が非常によく分かる貴重な絵面資料となっている。あちこちに白い花を咲かせた桜が描かれている。練兵場では、砲兵、騎兵、歩兵がそれぞれに訓練を行っており、しかも市民がその場を通っている。小学校では子供たちが遊び、監獄では囚人たちが労働をし、芝居小屋には雑旗が立ち並び客を呼んでいる。穏やかな春の情景である。





一九

手取本町・藪之内(部分)

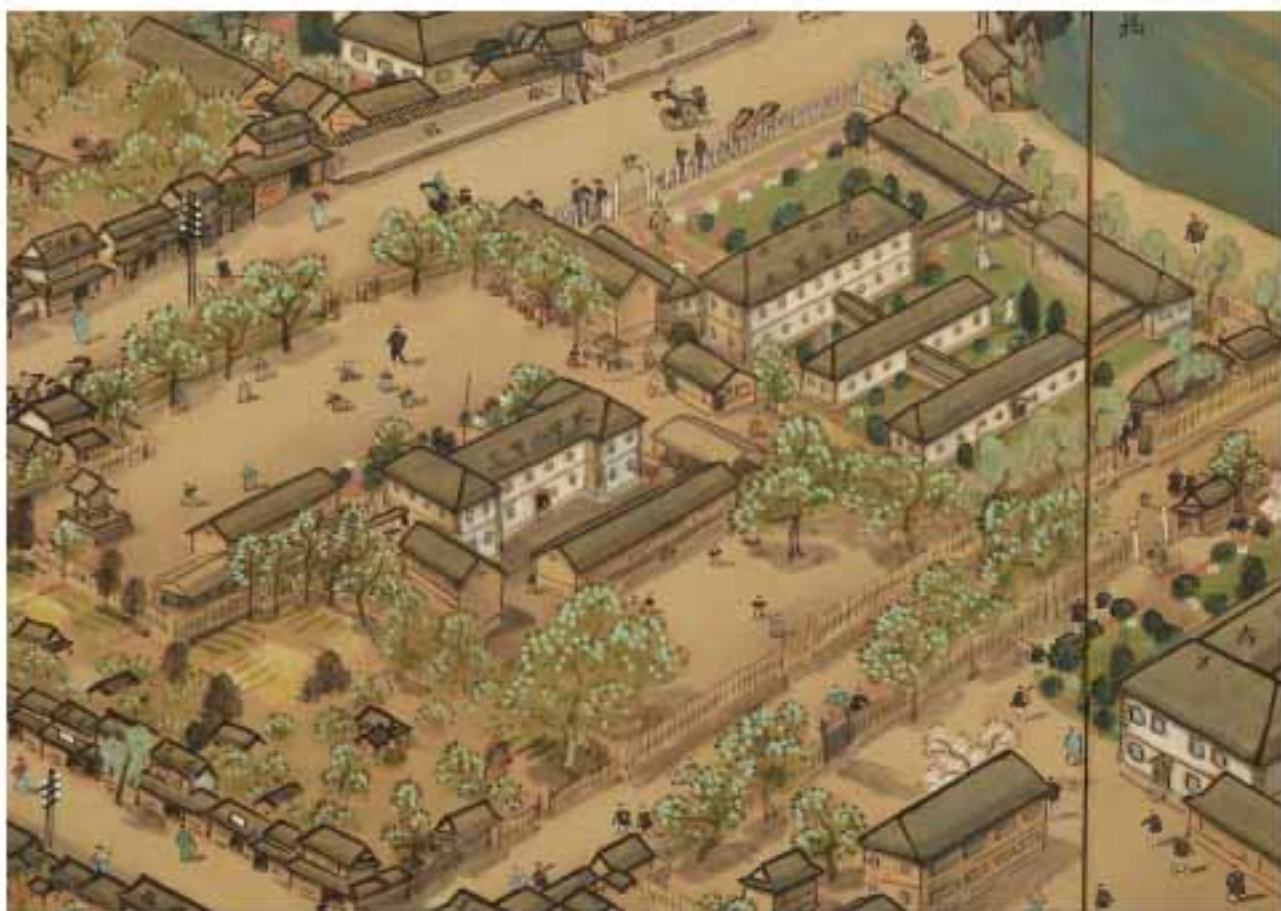
手取本町から既橋に至る界隈は、明治時代でも熊本の中心地であった。現在の市役所の位置は旧藩時代の邸舎で、その跡に熊本監獄が建てられた。上通りと坪井川に挟まれた藪之内と呼ばれた手取本町北側一帯は文教地区となり、いくつかの学校が複雑に入れ替わった。この絵の明治三十年代には、手取本町に面して最も西側に県立病院が

あり、これは明治三十四年に移転後は、私立熊本医学校として使われた。その東側には高等小学校、その北側には黒髪に移転前の中学済々黉があった。

既橋を渡ると左手には、明治二十四年に開業した熊本電灯会社の赤レンガの発電所があり、熊本の電気はここから供給されていた。須戸口門へ入る坪井川の岸には、現在も三本残る榎の木がある。

監獄の隣の坪井川は人の交通や物資の輸送

に使われ、二艘の高橋舟が勧つている。坪井川は昭和二十八年の六・二六水害の後、河川改修により数回深くなったが、それまでは水面は人の目線のすぐ近くにあった。当時の手取本町の道路幅は、病院の前でも一〇に満たなかったが、広く描かれた往来には人力車、天秤棒を担ぐ物売り、荷駄を運ぶ大八車や馬などが描かれており、人々の行き交うところだったに違いない。



二〇

県立病院・医学校と高等小学校（部分二〇）

明治期の手取本町と敷之内は最も早く近代化が起つた場所で、建物や機関も目まぐるしく変わった。西南戦争翌年の明治十一年五月、洋風二階建ての県立病院が今の日本郵政グループ熊本レールの位置に、九月に同じく洋風二階建ての県立医学校がその東隣に新築された。この医学校は富重利平による落成式の写真が残されている二冊。しかし二十一年に医学校は廃止、跡地にはこの熊本高等小学校が新築された。また県立熊本病院と改称された病院も明治二十二年に一旦廃止、だが同地で二十八年に再興し、最終的に三十四年に本荘町に移転した。同年、この病院の残った建物を再利用する形で私立熊本医学校が入った。この医学校は明治三十七年私立医学専門学校となり、最終的に大正元年に本荘町の県立病院の南の隣接地に移転した。

高等小学校は洋風二階建てで、両隣に翼部のある左右対称の建物で、高等小学校としては立派な建物である二冊。校庭の東側にはおそらく奉安殿と思われる祠堂、西側には井戸があり、生徒たちは皆男子で袴をはいている。



熊本監獄(部分一)

熊本監獄は明治五年に、現在の市役所の位置に牢屋が造られたことに始まる。旧藩時代には既舎があった場所である。県の記録としては明治十年ごろから建物の記録が残されているが、十三年に敷地は正式に熊本監獄の所有となり、近代監獄として建物が少しずつ増築され充実していった。

監獄は屋根に朝あぎ竹たけを載せた塙がけで周囲を囲まれ、手取本町側が入り口で、北側から拘置区域、男子区域、女子区域、作業区域に分かれていた。絵はこれらを正確に描き分けているわけではないが、男子区域と女子区域は罫はみで分けられている様子が示されている。男子房には十字形とT字形の獄舎が描かれているが、実際には二種の大小の十字形の獄舎があった二五。

熊本監獄は大正四(一九二五)年に大江渡座の現在地に移転するまでここに存続し、跡地には大正十二(一九二三)年に市役所が建てられた。監獄の写真は残されていないが、富重利平が向かいの高等小学校の二階から、明治四十二年三月十五日の清正公三百年祭の記念式典の際に校庭に集まった生徒たちを撮影した記念写真に、遠景として写っている写真が唯一である。

追憶の熊本



三一

安巴橋通、白水館（明治三十七、八年ころ）

白水館は安巴橋通りに面していた旅館で、駕町通りとの交差点にあった。旅館の前には一本の杉か檜ひのきのような真つすくな樹木が植えられていた。この絵では旅館の右手の一角は店舗になっていたようだが、「安巴橋通明治町並園」では、ただ格子窓だけが付けられている。青萍の自宅の数軒西隣であった。



三三

安巳橋通 市原屋呉服店付近（明治十九年ごろ）

青井自宅横の安巳橋通りで、火の見櫓の後ろが青井の自宅である。市中で火の見櫓があるのはここだけだが、これは明治後期になるとなくなった。正面二階建ての店が市原屋で、店の主人らしい人が座っている。店の前には桜が満開で、和服の女性、腰の曲がった老女、赤ゲートの人、青笠を被り天秤棒を担いだ人などが歩いている。



四五

昇町 尚綱女学校（大正年間）

尚綱女学校は済々養附属女学校として昇町三番地に明治二十二年（八八八）年四月に開校し、熊本の女子教育の草分けとなった。安巳橋通りから青萍の自宅の角を昇町に入っていくと、すぐ左側にあった。板壁に囲まれた敷地に木造二階建ての建物が数棟あったようである。校門前の通りに、五人の風呂敷包みを持った袴姿の女学生が描かれている。明治二十四年十月尚綱女学校として独立したが、その後、敷地が手狭になったため、大正九年に九品寺の現在の地に移転した。E。



四六

昇町 市野質店付近（昭和二十年ごろ）

昇町は安巳橋通りから南に入った少し狭い通りで、青萍の家は安巳橋通りと昇町通りの角にあった。この絵はしたがって、青萍の家から少し南に入ったところであろう。男一人の通行人は足にゲートルを巻き斜めに靴を提げており、また子供はモンペに防空頭巾を被っている。裏書には「明治二十年頃」と書かれているが、戦争中の風景であるので、おそらく昭和二十年ごろの間違いかと思われる。



四七

水道町 松藤米屋付近（昭和十四、五年ごろ）

水道町は、大正十三年に手取本町に市電が通り、新しく架けられた大甲橋を渡って水前寺に向かう路線と、子飼方面や藤崎宮前から上熊本へ向かう路線が交差する場所となり、大きく発展した。水道町交差点の北西の角地には手取幼稚園があり（〇〇）、松藤米屋はそこから白川公園方面に向かうとすぐ左側にあった。昭和十四、五年ごろには、市内に鉄筋コンクリートの建物が次第に普及し始めていたことは、「熊本昭和町並図屏風」でその様子が分かるが、この絵によると、水道町にはまだ木造二階建ての建物がずらりと並んでいた。



四八

手取本町 手取小学校（大正十一年）

手取小学校は明治十一年に、手取本町の敷地に設立された。明治・大正時代の地図には、手取神社参道の道向かい、現在の鶴屋百貨店東館付近に、南北に細長い敷地として描かれている（〇〇）。

この絵は、手取神社鳥居付近から通りを挟んで、校門とその後ろの校舎北翼部を見た光景で、正面一階には玄関、階段などが見え、右手奥には南翼部が見えている。通りに面しては角材による櫓を廻らし、右手の路地には板塀が廻らされている。正面の櫓に沿ってドブがあり、右手には路地が見えている。